

文部科学省事業の活動報告 二〇〇九年度をふりかえつて

は、本記事作成時点で未開催のため、報告者と題目のみを掲載し、概要については次号に抄録する。なお、今後も続行を予定しております、多くの方々の参加を切望する。

早稲田大学イスラーム地域研究機構を中心拠点とするイスラーム地域研究のネット

ワークは、二〇〇八年度「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」（文部科学省）に採択され、また二〇〇八年一〇月には共同利用・共同研究拠点として文部科学大臣認定を受け、共同研究拠点の構築に努めています。

早稲田大学イスラーム地域研究機構では、以下のようない活動を行っています。

- 一 定例研究会
- 二 マイクロフィッシュ資料の共同利用
- 三 イスラーム地域研究機構への訪問者
- 四 公募研究の研究会
- 五 イスラームにおける知の構造と変容：思想史的視点からの解説
- 六 拠点強化事業
- 七 その他の活動・他拠点の活動

各項順に二〇〇九年度の活動をまとめました。

一・定例研究会

早稲田大学イスラーム地域研究機構では（原則第四水曜日、一六時から、会場は早稲田大学）、定例研究会を開催している。

本会は、機構所属の専任研究員の研究成果を公開する場であるとともに、早稲田大学学内および学外の関連研究者に報告を依頼し、広くイスラーム地域研究にかかる研究交流の場としている。また、公開の研究会という形をとり、広く参加者を募り、学際的な議論を深化させるとともに、イスラームに関する新たな話題を提案し、イスラーム研究の社会還元をも目指している。

二〇〇九年度には、以下に示す九回の定例研究会が開催された。一時間程度の新進気鋭の専門的報告に続き、学内学外からの参加者を交え、一時間程度の興味深い討議が行われた。各会とも、終了後にも、場所を移して遅くまで議論が続き、発表者、参加者とともに、互いの専攻分野を超えて、刺激を感受する格好の機会となつた。

それぞれの報告者、題目、および概要を記す。なお、二月開催の第九回に関して

▼第一回定例研究会

二〇〇九年四月二二日
報告者：野田仁（早稲田大学イスラーム地域研究機構 研究助手）

報告題目：「一八〇一九世紀のカザフ草原と露清帝国」

本報告は、一八から一九世紀において、ロシア帝国と中国清朝と双方に関係を持つていたカザフハン国の事例に注目し、帝國間の狭間に置かれた勢力の帰属と境界の問題を考察するものであつた。

報告者は、カザフハン国と清朝およびロシア帝国の関係を整理した上で、両帝国のカザフ遊牧民に対する異なる対応、またそこから派生したカザフ草原をめぐる両国間の摩擦について明らかにした。またロシア帝国によるカザフ草原における管区制度の展開が遊牧地の境界を定め、それが一八三〇年代以降、次第に清朝との（南方ではコーカンド＝ハン国との）境となり、最終的に一八五〇年代には実質的に両帝国間の国境と変わる過程を論じた。

境界、帰属、民族を複合的にとらえるために、従来ロシア帝国との関わりが考察の中心であったカザフハン国に対し、清朝との関係性を勘案しながら、両帝国の狭間に流れ、巻き込まれつつあるカザフを主体とし、当時の情勢に光を当てる興味深い発

表であつた。初回から民族の帰属意識と帝國の政策に関する議論が盛り上がり、幸先のよいスタートを切つた。

▼第二回定例研究会

二〇〇九年五月二七日

報告者・貫井万里（早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手）

報告題目・「一九五〇年代イランの石油国有化運動とバーザール商人」

本報告は、一九五〇年代イランの石油国有化運動におけるテヘランのバーザール商人の抗議運動を分析するものであつた。

一九〇一年にガージャール朝のモザッファアロッディーン・シャーより、イギリス人投機家ウイリアム・ノックス・ダーシーに石油利権を付与されたことに始まるイランにおける石油産業の発展について概観した。一九世紀末以来、バーザール商人は、近現代イランのナショナリズム運動において重要なアクターであつた。石油国有化運動期のバーザール商人の役割について、宗教的要因を重視する見解と、資源動員論に基づき経済的要因を重視する二つの代表的見解があることが紹介された。

本報告では、モサッデク政権期（一九五一年四月～五三年八月）に生じたバーザール商人の抗議行動について、社会運動論の「イベント分析」の手法を用いての考察が中心に論じられた。その結果、テヘラン・バーザールの閉鎖の決定権を持ち、バーザールで最も重要な組織であった商人・アスナーフ・職人連盟の抗議行動にもたない。ヨルダン・アイデンティティ浸

関して、宗教的要因が從来考えられてきたほど、大きな影響を与えていなかつたといふことが述べられた。

参加者は、バーザール商人と宗教指導者の歴史的関係について、中世の事例との比較からコメントが寄せられ、一九七九年のイラン革命におけるバーザール商人の動向、「イベント分析」のデータソースとしてのペルシア語新聞の有効性についての質問があつた。

▼第三回定例研究会

二〇〇九年六月二十四日

報告者・錦田愛子（早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手）

報告題目・「ヨルダンのパレスチナ人―併合・統合政策とアイデンティティ」

ヨルダン政府の併合・統合政策が、ヨルダンに住むパレスチナ出身者のアイデンティティに与えた影響に関する発表であつた。三時期に分けて分析する発表であつた。

アイデンティティの複合性と国家統合原理としてのアイデンティティ操作を基盤として、国家統合のために用いられる「イデオギー」としてのナショナル・アイデンティティは、実際にどこまで人々の意識の中に定着することが可能かという問題に切迫した。

ヨルダンに住むパレスチナ出身者のアイデンティティに与えた影響に関する発表であつた。

▼第四回定例研究会

二〇〇九年七月二二日

報告者・小島宏（早稲田大学社会科学総合学術院・教授）

報告題目・「日欧におけるムスリム移民の宗教実践―ミクロデータに基づく比較分析」

二〇〇五～二〇〇六年「在日ムスリム調査」と二〇〇二～二〇〇三年「歐州社会調査」のデータを比較分析し、日本とヨーロッパにおけるムスリム移民の宗教的実践状況とその規定要因を明らかにするための予備的分析の結果を紹介した。

ムスリム移民男性における宗教的実践状況をクロス表によつて、滞在年数別にみると

透の圧力は一定の効果をもち、多元的のアイデンティティの一部として抵抗なく受容されるにいたつた。そこでは、ヨルダン・アイデンティティを非選択的なもの、パレスチナ・アイデンティティを自由意思に基づくものと見ることも可能である。三時期を通じて人々の選好はきわめて機会主義的であり、日常生活に役立つ権利に付随すること等にまとめた。

参加者は、ヨルダンにおけるパレスチナ人の権利、差別、区別の現状に関する質問に加え、具体的な利益と結び付いた国籍と、心の中にある自己のアイデンティティと国籍をどう切り分けるのかという点について問題提起があつた。また、「名のり」の際にみられる内面的重層性の存在が指摘されるなど議論が弾んだ。

と日欧ともに滞在期間六～一〇年にピークがあり、年齢階級別にみると日欧ともに二〇代後半にピークがある。多項目ロジット分析を用いて規定要因を探ると、宗教的厳格性は、日欧で自営・小規模事業所勤務の場合に共通して高く、ヨーロッパでは滞在時間が短い場合と学歴が高い場合にも高くなるが、年齢に関しては日本では三〇代前半、ヨーロッパでは二〇代後半で高くなる。礼拝頻度は、日本では三〇代前半で高く、短大高専卒で低いが、ヨーロッパでは二〇代後半、現業職・無職で高く、滞在五年以下で低い。宗教活動参加は、日本では滞在六～一〇年で多く、高卒以下、自営で少ない。一方、ヨーロッパでは専門管理職で多い。

参加者からは、ロジット分析結果の表の

読み方、統計手法などの基礎的な質問に加え、ヨーロッパでの地域偏差の大きさ、宗教的実践と信仰心の深さなどについて興味深い討議が続いた。

期間が短い場合と学歴が高い場合にも高くなるが、年齢に関しては日本では三〇代前半、ヨーロッパでは二〇代後半で高くなる。礼拝頻度は、日本では三〇代前半で高く、短大高専卒で低いが、ヨーロッパでは二〇代後半、現業職・無職で高く、滞在五年以下で低い。宗教活動参加は、日本では滞在六～一〇年で多く、高卒以下、自営で少ない。一方、ヨーロッパでは専門管理職で多い。

参加者からは、ロジット分析結果の表の読み方、統計手法などの基礎的な質問に加え、ヨーロッパでの地域偏差の大きさ、宗教的実践と信仰心の深さなどについて興味深い討議が続いた。

その検証のために、イスラーム世界を縦断する流行と、各地での既存文化の積極的に取り入れという葛藤の側面を辿った。忌避には、風土や技法による流行の限界が大きくかかわり、受け入れる土地のもつ許容力、広がるもののもつ拡張性を問い合わせることが重要であることを論じた。

夏休み直後であり、参加者は限られていましたが、イスラーム建築文化の持つ特殊性などが指摘され、今後、工人の移動など文献研究との共同関係が示唆された。

▼第五回定例研究会
二〇〇九年九月三〇日
報告者・深見奈緒子（早稲田大学イスラーム
地域研究機構・研究院准教授）
報告題目・「建築文化に見るイスラームとは？—グローバリズムとローカル
リズムの葛藤」

アラビア語地方史の一種である「地方史人名録」に注目し、編纂流行の展開、および編纂・流通・利用過程の解明を課題とし、ハディース学者の著述活動と考察することを目的とした。

▼第六回定例研究会
二〇〇九年一〇月二八日
報告者・森山央朗（上智大学・非常勤講師）
報告題目・「ハディース学者の著述活動
—一〇～一三世紀の地方史人名
録編纂流行の実態と背景」

▼第七回定例研究会
二〇〇九年一一月二五日
報告者・佐藤健太郎（早稲田大学イスラーム
地域研究機構・研究院准教授）
報告題目・「スペインのアラブ学とアングルス」

「地方史人名録」は、一〇世紀後半から一二世紀前半に規模、内容、形式を充実させ、イスラーム世界の地理的周縁部にある中規模都市から中心的な大都市へと展開した。一方一三世紀後半から一六世紀にかけて作品数も減り、続編・抜粋が主流となり、小規模、単純化される傾向が認められた。こうした「地方史人名録」の編纂流行の盛衰には、ハディース学の盛衰と運動が認められ、地方史人名録の編纂流行は、ホーリー・サーン系「ハディースの徒」を中心としたハディース学者のネットワークに生じた現象と結論できる。

したがって、「地方史人名録」は、ハディース学者の学問的活動の一環として編纂され、知的伝達として流通し、学問活動に利用されるという連鎖構造を形成して展開していくと言える。この連鎖構造の中で、「地方史人名録」はハディース学者の学問的評価獲得の一つの手段となり、社会的影響力の基礎となる学問評価形成における働きをしていたのである。

は、アラブ学に比して、イラン学、トルコ学が立ち遅れているとともに、アラブ学の研究対象ももっぱらアンダルスにあるという特殊性が指摘できる。その歴史的経緯を解き明かし、時代状況からは無縁でいられないアラブ学の実態に関して言及した。

一八、一九世紀はアラブ・イスラーム文化再評価の時代で、宗教的寛容の立場から、アラブ・ムスリムたちの高度で洗練された文化が強調され、アンダルスの住人達は寛容の対象となる他者である一方、スペインの地で高度な文化を展開したことが誇りとされた。二〇世紀になるとスペインとしてのアンダルスが強調され、先住民の征



第八回定例研究会の様子

服者に対する文化的優越が説かれ、アラブ・ナショナリズムに対してアンダルスの遺産は「我々のもの」という認識が強まる。一九七五年のフランコの死をきっかけに、二〇世紀末には「ムスリム・スペイン」から「アンダルス」へと認識が移行する。すなわち、アンダルスは基本的に「東洋的」な社会であり、とりわけベルベル的因素が重要であると論じたギシャールの影響を受けつつ、アンダルス社会をスペインの原史としてではなく、それ自体の意味を持つものとして研究するべきであるという認識が、アラブ学者の間で一般的になりつつあるのである。

発表の後、地中海研究との関連性、スペイン史の枠組みの中のアンダルス史、アカデミックな側面だけでは見えない部分などを議論が白熱した。

▼第八回定例研究会
報告題目…岡井宏文（早稲田大学多民族多世代社会研究所・客員研究員）
報告者…岡井宏文（早稲田大学多民族多世代社会研究所・客員研究員）
題目…「滞日ムスリムと日本社会—岐阜市における『外国人』に関する意識調査」より

早稲田大学店田研究室「全国モスク調査」結果から、宗教的基盤の獲得過程と現状の課題を提示し、同「外国人に対する意識調査」から地域社会におけるイスラームの認識と課題を提示した。

現在滞日ムスリムは約一〇万人を数え、多様な国籍集団から構成され、エスニッ

ク・ビジネスが興隆するとともにモスク等の宗教的基盤の整備も進んでいる。設立資源の間口が拡大するとともにモスク設立ラッシュを迎え、イスラーム団体が形成され、マスジドネットワーク構築が議論される中、日本社会のイスラームへのまなざしを明らかにすることが重要な課題となる。岐阜市における日本人の外国人に対する質問紙調査に対しクラスター分析および多重応答分析を実施した。結果、四つのクラスターが析出され、それぞれを平和・寛容型、厳格・評価型、攻撃・拒否型、曖昧・中間型と名付け、その他の質問項目との検討を実施することにより各クラスターの特徴を提示した。また、それぞれのクラスターのイスラームイメージと受容態度の関係性を明らかにするために、共分散構造分析を用い、モデル構築を試行した。

日本人とムスリムという参加者に共通する話題であったこともあり、難しい統計学的手法から離れ、それぞれの経験やイメージや受容態度に話題が集まつた。

▼第九回定例研究会
報告題目…橋爪烈（日本学術振興会・特別研究員）
報告題目…「スンナ派カリフの誕生—カーディル、カーラム親子のカリフ権復興に向けた試みと知識人たち」

二・マイクロファイツシュ資料の共同利用

大英図書館所蔵アラビア語写本マイクロファイツシュについて

坂東和美

慶應大学大学院文学研究科博士課程

早稲田大学イスラーム地域研究機構では、共同利用・共同研究の支援体制の一環として、マイクロファイルムリーダー、大判プリンタなどの施設や図書資料などを研究者の利用に供しています。施設については機構ウェブサイト(<http://www.kikou.waseda.ac.jp/jas/>)をご覧ください。

とくに貴重な資料としては、マイクロフィツシュ資料「英國図書館所蔵アラビア語写本集成」があります。全八部、合計一五〇〇〇点近くのアラビア語写本で構成されるこの集成は、法・科学・哲学・文學・歴史などの様々な分野の研究者にとつて利用価値の高いコレクションになっています。皆様のご利用をお待ちしております。

第一部「クルアーンとその研究」

第二部「ハディースとカラーム（イスラーム神学）」

第三部「マイクロ（イスラーム法学）」

第四部「イスラーム神秘主義・哲学」

第五部「歴史と伝記」

第六部「アラビア語・アラビア文学」

第七部「芸術・科学・医学」

第八部「その他の宗教関連文献」

慶應大学大学院博士課程の坂東和美さんには、利用体験を踏まえて、右の史料について簡単にご紹介いただきました。

近年、インターネット上の図書館サイト、蔵書検索ページの整備が進み、日本にいながらにしてオンライン上で写本複写を申請し、写本の画像データを取得するといふことが、一部の図書館においてではあるが可能になってきている。また同時に写本などのデジタル化も進んできている。一部のコレクションはすでにCD-ROMなどの媒体で提供されているし、エジプトの国立文書館は所蔵文書のデジタル化を進めつつ、一部の文書データのオンラインでの公開を始めている。このようなITの発展は今後の研究のありかたを変えていく可能性が高いが、しかしながら、まだ全面的に変わってしまうほどには整備はすんでない。また、海外から写本のコピーを取り寄せるには、ある程度の煩雑な事務作業と、なにより複写・輸送費用を必要とするため、中身もわからぬまま闇雲に取り寄せることは難しいのが現状である。

そのなかで、現在イスラーム地域研究事務所では、大英図書館所蔵アラビア語写本コレクションのマイクロファイツシュが所蔵され、閲覧が可能となっている。

このコレクションは、もとのインディア・オフィス・ライブラリーのコレクションであつたものを含むおよそ一五〇〇〇タイトルのアラビア語写本からなり、マム

ルーケ朝スルタン・バイバルスのクルアルなどのクルアーンの一群をはじめとして、クルアーン関連諸学、ハディース学、法学などのほか、哲学や文法学、文学、歴史学、地理学、音楽、天文学など多様な学問分野の写本がおさめられている。

報告者は、中世アラブ史研究、とくにマムルーク朝期の研究を行っており、現在このコレクションを利用しているが、これらが簡単に利用できるのは非常に有益なことである。それはまず、このヨーロッパでも有数のコレクションの中に、研究対象とするマムルーク朝期に著された年代記、伝記、人名録、地誌などが数多く含まれているためである。またそれらの作品について、著者自筆写本や、書写年代の古い写本も多く含まれており、また同一の作品の複数写本を所蔵するような事例も複数例ある。複数の写本を比較検討することを考える際見るべきものは多い。

もちろんコレクションの中には基本的な史料としてすでに校訂・出版が行われた写本も多いが、未刊行の写本も多い。また、すでに刊本があるものでも、様々な理由から今一度写本に目を通さなければいけない場合も多い。その意味において、日本において写本にアクセスする機会がこのコレクションによりさらに増えたことは、中世アラブ史の研究の発展を押し進めていく一つの要素となるのではないだろうかと考えている。



井上元大使を囲んで議論が白熱した、
中央が井上元大使



前列、左より佐藤機構長、シャブトー・アッレマーディー教授、マンスール教授、2010年1月26日



チュニジアからの訪問者を迎えての意見交換



モロッコからの訪問者を迎えての意見交換

三．イスラーム地域研究機構への訪問者

早稲田大学イスラーム地域研究機構では、国内ばかりでなく、海外、特にイスラーム圏のイスラーム研究者をお迎えし、機構の紹介を行いました。

なお、二〇一〇年二月一九日には、井上正幸元バングラデシュ大使を迎え、お若い時に過ごされたイランと赴任地バングラデシュを対比し、イスラームの普遍性と固有性についてお話を伺いました。

海外からの訪問者

湯川武

早稲田大学イスラーム地域研究機構教授
チュニジアからの訪問者
二〇一〇年一月二六日、チュニジアの

チュニジアにおける歴史研究の現況についてお話を伺った。今後の交流の可能性についての話もはずみ、有益な意見交換の場を持つことができ、お客様にも早稲田側にとつても有意義な懇談会であった。

モロッコからの訪問者

二〇一〇年二月二日、モロッコのフェズ大学のアブデルハック・アズーズィー教授の訪問を受けた。同教授はモロッコ戦略・国際学術研究センターの会長を勤めるほかに、フェズ世界宗教音楽祭の開催等を活発に行っている人物で、日本のイスラーム地域研究の中心である早稲田大学にも強い関



前右より二人目がアズーズィー教授

心を抱いて訪ねてこられた。モロッコ史に詳しい佐藤健太郎と湯川・鈴木・砂井研究員が対応したが、アズーズィー教授の熱意と闊達さもあって、友好的な雰囲気で活発な意見交換の会となつた。

四・公募研究の研究会

二〇〇八年に公募を行った共同研究課題の成果を報告いたします。早稲田大学拠点では研究課題「イスラームにおける知の構造と変容—思想史的視点からの解明」（代表・小林春夫（東京学芸大学・教授））の共同研究が進められています。主な活動は以下の通りです。



第43回「イブン・スイナー『治癒の書』研究会の様子

▼チャールズ・バーネット教授特別ワークショッピング「科学的知の伝承—ギリシア、シリアルズ、アラブ、ラテン」（共催・京都産業大学）
イスラーム文化のヨーロッパへの影響史研究の第一人者、チャールズ・バーネット博士（Dr. Charles Burnett）を迎えて、国内の代表的研究者をパネラーとして、地中海を巡る諸文化間の科学的知の伝播と変容の実態に迫るワークショップが二日間にわたって開催された。

【二〇〇九年一二月九日 ワークショップ】
司会・野元晋（慶應義塾大学・教授）
報告題目・「アラビア語とラテン語でのトレマイオス『アルマゲスト』の伝承」“The Arabic and Latin Tradition of Ptolemy's Almagest”
報告者・チャールズ・バーネット（ロンドン大学・教授）
コメントーター・三浦伸夫（神戸大学・教授）
概要・バーネット教授は、これまで天文学、占星術、魔術、数学など様々な分野におけるアラビア語やラテン語などのテキストを発掘、校訂、翻訳を手がけており、本講演では『アルマゲスト』のアラビア語とラテン語での翻訳、およびその伝承過程で起きた改変について紹介がなされた。古典期の最も重要な天文学書である『アルマゲスト』はシリアルズ語、ペルシア語、アラビア語、ラテン語に訳された。西洋で最も普及した版はクレモナのゲラルドが作成した

版とイスハーカ・ブン・フナインが翻訳しサード・ブン・クッラが改訂した版を元にしている。このラテン語版とギリシア語の原書を比較すると大きく二つの違いがあるという。ひとつはトレマイオスが道德記と格言集、および著作の伝承の説明から成る序文の追加のため。原書とラテン語訳のもうひとつの違いは第一章の表現が変更されていて、『アルマゲスト』が神を知るための作品とされていること。天文学や数学の学習は哲学的生活のために価値があり、学習者を神的学問へと導くものと著者は考えていた。（）でトレマイオスにとっては形而上学に等しかった神的学問が、ラテン語版では神の知識に変わっている。結論として、こういった『アルマゲスト』改変の背景には、イスラームおよびキリスト教という一神教の環境があつたといふ（文責・矢口直英）。

報告題目・「ギリシア語とアラビア語の狭間—シリアルズ語による学問・セヴェルス・セボフトからバルヘライウスまで」“Between Greek and Arabic - The Sciences in Syriac from Severus Sebokht to Barhebraeus”
報告者・高橋英海（東京大学・准教授）
コメントーター・山本啓一（京都産業大学・教授）



占星術の宿曜の図、MS Oxford, Bodleian Library, Oriental 133, fol. 27v.

概要・本講演では、ギリシアからアラブへの思想・科学の伝達の経路として、その重要性が指摘されるシリア語並びにその著作群・著者に関する網羅的な解説がなされた。まず、シリア語の主な特色—中東地域のリングガ・フランカであり、国家・帝国という枠組みを超えた言語であるとともに、キリスト教との密接な関係のもと歴史的展開を辿つた—が確認された。特に、論理学者であり、天文学者のセヴエルス・セボフト(七世紀)及び一二世紀の「シリア・ルネサンス」を代表する著述家グレゴリー・セボフトは、ギリシア人が自民族固有の学問であると主張する哲学・天文学などの学問が、ギリシア人・非ギリシア人双方の財産であるという見解をその書簡内において強調することで、普遍性を基調とした学

ト(=非キリスト教的)な学問として位置づけた上で、その研究の必要性を論じていることも注目に値する(文責: 倉澤理)。

【二〇〇九年一二月一〇日 講演会】

講師: チャールズ・バーネット(ロンドン

大学・教授)

コメントーター: 山本啓二(京都産業大

間観を示すとともに、領土を持たない言語としてのシリア語の、学問分野における存在意義を強調している。バルヘブライウスの著述で注目すべき点は、かつて翻訳というギリシア学問との仲介役を担つたシリア語文化が、今度はアラビア語文化より影響を受ける立場になつてゐるという指摘が著者自身によつてなされ、両言語の伝統の密接な関わり合いを例示している。また、バルヘブライウスが、ギリシア由來の学問を世俗的(=非キリスト教的)な学問として位置づけた上で、その研究の必要性を論じていることも注目に値する(文責: 倉澤理)。

演題: 「ファーラービー、キンディー、アル・カシミー、マアシヤルにおける占星術に関する理論的議論」“The Theoretical Arguments for Astrology in al-Farabi, al-Kindi, and Abu Ma’shar”

概要・バーネット教授によつて、アラブの学術における占星術の位置付け、及び占星術の学問的正当性を主張するためになされた議論について、講演が行なわれた。中世に著されたテキストにおいて、占星術は数学の中に位置付けられるか、自然学の一区分として位置付けられているという。ま

ず、アラビア語から翻訳されたラテン語テキスト(著者不詳)およびアヴィセンナ(イブン・スイーナ)による占星術の区分(両者は自然学の中に位置付けている)を概観した上で、演題中の学者らの議論について詳細な検討が行なわれた。

ファーラービーは占星術を数学の中に位置付ける。彼の議論は、プトレマイオス著『テトラビブロス』の記述を反映したものとなつてゐる。同書では、天文学には厳密な論証が必要であり、占星術にも正しい哲学的手法が必要であるとされている。キンディーとアル・マアシヤルの場合も、キンディー(論理学において、三段論法を意味する術語であるが、両者の議論においては類推程度の意味だと考えられる)の必要性が説かれているといふ。最後に、彼らの著作がラテン語に翻訳され、ヨーロッパ世界に大きな影響を及ぼした点についても言及された(文責: 加藤瑞絵)。

五. 拠点強化事業

早稲田大学拠点では、拠点強化事業として、研究課題「[モノ]から見た知の技術と生活文化の変容と交流」（代表…真道洋子（イスラーム考古学研究所・主任研究員））の共同研究進めています。二〇〇九年度の主な活動は以下の通りです。

二〇〇九年三月に共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究拠点早稲田大学拠点より “Artifacts of the Islamic Period – Excavated in the Rayyal-Tur Area, South Sinai, Egypt – Ceramics/Glass/Painted Plaster”, を発刊、ハジアブ・シナイ半島の歴史的港市ラーヤとトゥールから発掘した陶磁器とガラス、およびラーヤのモスクから発掘した彩色スタッフについてまとめ、発掘品からみた港市の歴史を考察した。遺物は、ビザンティン時代からイスラーム時代における港市の性格を反映して、各地からもたらされた「モノ」がある。日本隊のイスラーム遺跡発掘報告を、英文で広く世界に紹介する意義をもつた報告書である。

同五月一一日に、早稲田大学にて二〇〇九年度第一回研究会（通算第二回）が開催された。研究代表者真道より「ラスター彩陶器成立の背景としてのラスター・ステイン装飾ガラス」、三浦早苗（東京理科大学卒）より「イラク製ラスター彩陶器の化学的特性化」について発表があつた。

同八月には、真道洋子、加藤慎啓（東京理科大学）が、エジプト出張を行い、カイロ南にあるフスタート遺跡におけるガラス器と陶器の釉に関する考古学的および化学的調査を行つた。

また、二〇一〇年一月には、真道洋子と研究分担者の高橋信雄（花巻市立博物館）がエジプトに出張した。真道は、来年度刊行予定のフスタート遺跡に関する研究報告書の現地共同研究員との打ち合わせと、高橋は土器資料調査をカイロおよびケナ州で実施した。

二〇一〇年一月三一日には、早稲田大学小野梓講堂において第二回の公開講演会が開かれた。研究代表者真道より「シナイ半島の港湾都市—ラーヤとトゥール・キーラーニー」、西本真一（サイバー大学・教授）より「[モノ]造のモスクはどのように建てられたか—エジプト・シナイ半島ラーヤ遺跡の復元」、井関和代（大阪芸術大学・教授）より「移動する布」と三題の発表が続き、画像を豊富に用いて、生活文化の中から衣と住が取り上げられた。

▼二〇一〇年一月三一日 公開講演会
【「モノ」の世界から見たイスラーム】
第二回「エジプト・シナイ半島の港町にみる生活文化」（共催：イスラーム考古学研究所・司会：日下部達哉（早稲田大学イスラーム地域研究機構・講師）
講師…真道洋子（イスラーム考古学研究所主任研究員）
演題…「シナイ半島の港湾都市 ラーヤとトゥール・キーラーニー」
講師…西本真一（サイバー大学・教授）
演題…「[モノ]造のモスクはどのように建てられたか—エジプト・シナイ半島ラーヤ遺跡の復元」
講師…井関和代（大阪芸術大学・教授）
演題…「移動する布」

六. 早稲田大学イスラーム地域研究機構の主催・共催による活動

▼1100九年五月一日 第三回 アジ

アセミナー論争アジア「イスラーム金融の将来」（主催・早稲田大学アジア研究機構、共催・早稲田大学イスラーム地域研究機構）

司会・湯川武（早稲田大学イスラーム地域研究機構）
究機構・教授）

講師・小杉泰（京都大学・教授）／清水学（帝京大学経済学部・教授）

詳しく述べ「ワセダアジアレビュ」第六号（1100九年）を参考ください。

▼1100九年七月一七日 國際ワーク

ショップ「近現代史におけるイラクと日本・現代と伝統」Part II 歴史のなかの日本とイラク、中東の関係（主催・東京外国语大学 中東イスラーム研究教育プロジェクト 共催・早稲田大学社会科学総合学術院・早稲田大学イスラーム地域研究機構 後援・国際交流基金 日本研究機関支援プログラム）

本ワークショップは、バグダード大学歴史学科などから来日した六人のイラク人歴史学者・専門家を招き、日本の中東研究者および日本研究者との意見交換を目的として、日本とイラク、日本と中東の関係をテーマとして実施された。司会の酒井啓子氏（東京外国语大学）より趣旨説明があ

り、早稲田大学社会科学総合学術院の多賀秀敏院長による歓迎の挨拶に続いて、以下の報告が行われた。日本とイラクの関係を

テーマとする報告が多かつたが、とくにワリード・アブード・ムハンマド氏の報告

は、日本の近現代がイラクでどのように受け止められていたかの一端を知る貴重な機会となつたと思われる。

▼1100九年五月一日 第二回 アジ

アセミナー論争アジア「イスラーム金融の将来」（主催・早稲田大学アジア研究機構、共催・早稲田大学イスラーム地域研究機構）

司会・湯川武（早稲田大学イスラーム地域研究機構）
究機構・教授）

講師・小杉泰（京都大学・教授）／清水学（帝京大学経済学部・教授）

詳しく述べ「ワセダアジアレビュ」第六号（1100九年）を参考ください。

▼1100九年七月一七日 國際ワーク

ショップ「近現代史におけるイラクと日本・現代と伝統」Part II 歴史のなかの日本とイラク、中東の関係（主催・東京外国语大学 中東イスラーム研究教育プロジェクト 共催・早稲田大学社会科学総合学術院・早稲田大学イスラーム地域研究機構 後援・国際交流基金 日本研究機関支援プログラム）

本ワークショップは、バグダード大学歴史学科などから来日した六人のイラク人歴史学者・専門家を招き、日本の中東研究者および日本研究者との意見交換を目的として、日本とイラク、日本と中東の関係をテーマとして実施された。司会の酒井啓子氏（東京外国语大学）より趣旨説明があ

Chehabi) 特別講演会（共催・大阪大学世界言語研究センター）

講師・フーシャング・E・シェハービー博士（ボストン大学・教授）

演題：「イラン・イラク間の社会集団間関係」“Intersocietal Relations Between Iran and Iraq”

シエハービー博士は、ハーバード大学、オクスフォード大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校でも教鞭を執った経験を持つイラン政治と文化史に関する世界的に知られた研究者である。冒頭でホスト校を代表して早稲田大学イスラーム地域研究機構の湯川武教授が挨拶を行い、モデレーターの桜井啓子教授（早稲田大学国際教養学部）が司会進行を務めた。シエハービー氏

は、イランとイラクは民族の違いやイラン・イラク戦争といった背景から、敵対するようなイメージをもたれているものの、実際には相互に密接な関係に有していることを指摘した。その上で、両国にまたがつて住むクルド人、アッシリヤ人、イラン領内のシーア派アラブ人、ユダヤ人、シャイヒー派信徒集団、バハイー教徒、イラク領内の一二イマーム・シーア派信徒などの社会集団ごとに、国境を越えたネットワー

クの広がりと連続性について詳しく解説した。さらに、言語、料理、建築、音楽、スポーツ、殉教劇など、文化的に非常に近しい関係にあることを具体的に語った。

その上で、イラン・ナショナリズムがアラブを意識的に劣つた他者と見なすことで近代に形成されてきたこと、全く同様にイ

イラクにおいてはイランがナショナリズム昂揚に向けての敵としての役割を果たしてきた

一九七〇年代までに高まつたナショナリズムは、双方の国内の政治的少数派に対する文化的・物理的な同化政策が強制的に推進される背景にもなつたのである。

しかし、こうした上からの強烈なプロパガンダにもかかわらず、両国の社会的・文化的共通性により、人の移動は極めて頻繁に行われ、交流が深かつたこと、また、そ

もそもペルシア人対アラブ人の歴史的確執といったステレオタイプ自体が近代に恣意的に創造されたものである点について具体例を持つて示した。その上で、講演の最後には、むしろシーア派住民主導のイラク政

権の誕生により、イラク国家は初めてイラクにおいては異なる「国家」としての自意識を持たざるを得ず、またこうしたイラクの「自立」がイラン国内のクルド人などにこれまで比較的希薄だった「民族意識」を強化する方向に向けているという極めて興味深い指摘を行つた（文責：前田弘毅）。

▼ 桜井ゼミ・セッション

講演会終了後、シェハービー氏を囲み、早稲田大学教養学部桜井ゼミの受講生を中心としたセッションが開催された。シェハービー氏の代表的な論文を各自精読してきた受講生より、スポーツと政治、レバノン・イラン関係、ペルシア料理、革命後のイランの政治体制に関する質問が提起され、それにシェハービー氏が回答する形で

討論が展開した。

▼ 二〇一〇年三月六日 「中東における水管理の文化－文明・環境的視点から」

中東の水に焦点をあて、イタリア、イランから第一線の研究者を招聘し、国内の研究者を集めて開催される。一般に公開し、乾燥地域での伝統的水利用と、現代的問題を問う。

挨拶、開催趣旨
繩田浩志（総合地球環境学研究所・准教授）
「人間文化研究機構、総合地球環境学研究所、「アラブなりわい」プロジェクトについて」
佐藤健太郎（早稲田大学・准教授）
「早稲田大学イスラーム地域研究機構について」

谷口真人（総合地球環境学研究所・教授）
「聖なる水—宗教と地下水」

第一部「伝統的な水利利用と社会、文化－北アフリカ、西アジア、東南アジアの比較から」
司会：Ahmed T. Moustafa（国際乾燥地域農業研究センター、ドバイオフィス・所長）&遠藤宗浩（総合地球環境学研究所・助教）

福原隆一（国連環境計画IETC滋賀・プログラムオフィサー）

第二部「地域住民の利益のための水資源管理の課題」
司会：牛木久雄（元JICA国際協力専門員）
「チグリスユーフラテス川流域における水問題の累積としてのイラク南部湿原の環境危機」
錦田愛子（早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手）

「オスロ後の水資源をめぐる紛争と政治交渉」
箱山富美子（藤女子大学・教授）
「サヘル地域の飲料水供給の現状」
Pietro Laureano（イタリア在来知識研究センター・所長）

第三部 全体討論
司会：湯川武（早稲田大学・教授）、繩田浩志（総合地球環境学研究所・准教授）

利構造物に関する国際研究センター・所長）
「中東と西アジアにおける伝統的水管理体制・カナートとカレーズ」

佐藤次高（イスラーム地域研究機構長、早稲田大学文学学術院・教授）・吉村武典（早稲田大学大学院文学研究科・博士後期課程）

「エジプトの治水・灌漑問題—歴史的考察」
(佐藤次高「イスラーム時代エジプトの伝統的な水の観念」、吉村武典「ナイル治水行政の諸相—一四世紀マムルーク朝期を中心」)

（佐藤次高「イスラーム時代エジプトの伝統的な水の観念」、吉村武典「ナイル治水行政の諸相—一四世紀マムルーク朝期を中心」）

七・その他の活動・他拠点における活動

- WIAS (早稲田大学拠点)
- ▼100九年七月一日 NIHU プログラム・イスラーム地域研究「100九年度第一回合同集会 (KIASとの共催)
- ▼100一〇年三月一〇日 100九年度第二回合同集会 (早稲田大学)
- 第一部 文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」
- イスラーム地域研究拠点 公募研究および拠点強化事業 100九年度 活動成果報告
- 第二部 人間文化研究機構 (NIHU) プログラム・イスラーム地域研究 100九年度 活動成果報告
- 第三部 公開講演会「イスラーム世界の住まいと暮らし」
- 深見奈緒子 (早稲田大学) 「歴史都市における中庭式住居—伝統と未来」
- 鷹木恵子 (桜美林大学) 「チュニジア乾燥地帯のレンガ造建築とエコ・レンガ」
- TIAS (東京大学拠点)
- 公募研究「中東における政治変動と政治的ステレオタイプの変化に関する研究」代表・青山弘之 (東京外国语大学外国语学部・准教授)
- ▼100九年二月一四日 「中東における政治変動と政治的ステレオタイプの変化に

関する研究」第二回研究会

ト2 (中道派)

伊藤寛了 (東京外国语大学) 「イノニア時代

の世俗主義と中道派のマッピング」

多和田裕司 (大阪市立大学) 「マレーシアにおける「イスラーム」と「世俗」—「イス

ラーム国家／世俗国家」論争を中心に」

▼100九年九月二十四日 講演会 (共催.. 東洋文庫・イスラーム地域研究東京大学拠点) Devin DeWeese (ハーバード大学教授) "Modernity" and the Mythic Imagination in Central Asia: Legends of Origin and

Discourses of Identity in the 19th and early 20th Century"

光成歩 (東京大学大学院) 「マレーシア司法制度における世俗とイスラームの配置—「改宗問題」と管轄問題から考える」

小河久志 (総合研究大学院大学) 「世俗化と「再イスラーム化」のはざまを生きる—タイのムスリム・マイノリティ」

▼100一〇年一月二二日 「イスラーム社会の世俗化と世俗主義」100九年度第三回研究会

高橋圭 (上智大学) 「エジプトにおけるタリカ改革 (一八九五) 一九〇五) への道」

柏谷元 (日本大学) 「トルコにおけるタリカの閉鎖 (一九二五年)」

▼100九年六月二十七日 「イスラーム社会の世俗化と世俗主義」100九年度第一回研究会・「スマート・聖者研究会」

(KIAS4/SIAS3) 第一回研究会

小林寧子 (南山大学) 「インドネシアの『政教分離』—Snouck Hurgronje 再考」

KIAS (京都大学拠点)

公募研究「イスラーム法とテクノロジー」代表・江川ひかり (明治大学・教授)

拠点強化事業「越境文学としての現代イスラーム世界の文学—多言語比較文学研究の試み」代表・岡真理 (京都大学・准教授)

▼100九年七月二十五日 ワークショッピング「世俗化／世俗主義」と「イスラーム中道派」—イスラーム社会に対する二つのアプローチの可能性」(共催・KIASユニット)

▼100九年二月二八日 ワークショッピング「イラン・イスラーム革命三十周年—中東

諸国への政治・経済的インパクト」（共催・KIASユニット1）

松永泰行「イラン・イスラーム革命から三〇年—研究史とインパクト」

酒井啓子「イスラーム革命とサダメの三〇年—イラクの遅ってきた革命」

青山弘之「シリア—東アラブにおける霸権追求と革命イランの戦略的パートナーシップ」

末近浩太「革命の意味をめぐつて—シリ

ア・イスラーム革命とイラン・イスラーム革命」

細井長「革命後におけるイランと湾岸アラ

ブ諸国との経済関係」

松尾昌樹「オマーンとイラン革命」

保坂修司「湾岸安全保障とシーア派ファクターノ」

▼二〇〇九年七月一八日 二〇〇九年度第

三〇年—研究史とインパクト」

酒井啓子「イスラーム革命とサダメの三〇

年—イラクの遅てきた革命」

青山弘之「シリア—東アラブにおける霸権追求と革命イランの戦略的パートナーシップ」

末近浩太「革命の意味をめぐつて—シリ

ア・イスラーム革命とイラン・イスラーム革命」

細井長「革命後におけるイランと湾岸アラ

ブ諸国との経済関係」

保坂修司「湾岸安全保障とシーア派ファクターノ」

▼二〇〇九年六月六日 二〇〇九年度第一

回「イスラーム法とテクノロジー」研究会

角本繁「DiMSIS-EX (Disaster Management

Spatial Information System-Expansion) の活

用法」

▼二〇〇九年六月二七～二八日 第二回中

東現代文学研究会

徳原靖浩「アフマド・マフムード『隣人たち』について」

鶴戸聰「フランス語圏アラブ＝ベルベル文学」という問い合わせアルジェリアを中心につけて」

山崎和美（中東調査会）「イスラーム革命後のイラン—「復興と改革」の時代」

齋藤正道（東京外国语大学）「イスラーム主義の終焉?—アフマディー・ネジャード現象

平寛多朗「ナギーブ・マフフーズ『運命の悪戯』と三〇年代後期のエジプトの文学状況」

山岸智子（明治大学）「反植民地主義の弁証

壇治夫「マフフーズ文学と翻訳」

法とイラン近代史—ハミード・ダバーシーをたがりに」

▼二〇〇九年一月一八日 KIASユ

ニット1（国際関係） 第一回イラン政治

研究会「現代イラン政治の変化と構造—多

層分析から見えるもの」（共催・京都大学

拠点強化事業）

吉村慎太郎（広島大学）「冷戦と石油国有化運動の黎明—錯綜するイラン政治と大国政

治の一端面」

貫井万里（早稲田大学）「一九五〇年代イラ

ンの石油国有化運動とイスラーム主義組織

—シャムス・ガナダーバーディー回想録の考

察」

松永泰行（東京外国语大学）「アズィーミー批判—枠組みとしての立憲政治

(constitutional politics) 論の有効性と限界」

富田健二（同志社大学）「宗教界における自

然問題—革命前と革命後」

森豊子（鹿児島大学）「現代イランの学校

教育の中の女性」

総合討論 討論者：小杉泰

▼二〇〇九年九月二二日 KIASユ

ニット1「イラン文化研究会」（共催・文科省

拠点強化事業）

黒田賢治（京都大学）「在外イラン知識人による革命の回顧—パラダイム体制とイスラーム体制の相克を超えて」

第三回「イスラーム法とテクノロジー」研

究会

河原弥生（イスラーム地域研究東京大学拠点特

任研究員）「タジキスタン共和国山岳バダフ

シャン自治州における民間所蔵文書調査」

川本正知（奈良産業大学）「イスラーム法廷

文書—イクラール文書を中心として」

